

図書館だより

目次

楔形文字粘土版と古代の司書たち	——新海 邦治	1
「今、学生にすすめる本」特集（その14）		
——グエン・ヴァン・チュエン	佐藤 克志	2
石井 倫子	新見 肇子	
近藤 龍哉	渡邊 恵子	3
川原 ゆり	宮本 絢子	
『Symphonia JWU—日本女子大学創立百周年記念 学生論文集』について	——西山 力也	4
展示「貴女もなれるか『目白と雑司ヶ谷の達人』！」解説編	——伊藤 寿和	5
日本女子大学図書館友の会第38回（平成15年度）総会開催される		6
Technical Processing & Documentation Forum		
TP&Dフォーラム：整理技術・情報管理等研究会	——鈴木 学	7
図書館からのお知らせ（目白・西生田）		8
図書館事務室より	——上村美紗子	



楔形文字粘土版と古代の司書たち

新海 邦治

イラクに対するアメリカの軍事侵攻は多くの悲惨な出来事を後に残しながらも、大方の予想よりも短期間で軍事的決着をみた。しかしその後起きたイラク人自身による大規模で徹底的な略奪行為は、戦争そのものに劣らず衝撃的な事件だった。とりわけバグダドのイラク国立博物館では、およそ17万点にのぼる文化遺産が僅か数日で消え去るといふ、信じられないような略奪がなされている。イラクの位置する古代メソポタミア地方は紀元前三千年紀のシュメール王朝以来、民族の興亡をくり返した古い歴史を持つ土地であるだけに、博物館に収められていた考古学的発掘の成果は金銭などには替え難い重要な意味を持っていた筈である。博物館略奪という vandalism を引き起こすことによって戦争というものの vandalism 性が殊のほか際立ったのが、今回のイラク戦争だったように思われる。

ところでシュメール人の遺した最大の文化遺産は楔形文字の発明だったであろう。楔形と直線の組合せから成るこの文字は応用するに便であつたらしく、アッカド人、アッシリア人、エラム人、ヒッタイト人等々によって、彼らの言語を写すのにも用いられることになった。文字による文書の作成は、しかし、専門的な職能集団を必要としたらしく、シュメールの初期王朝時代から栄えた古代都市ニップール近傍で出土した多量の粘土板は、書記を養成する学校の存在を推測させるという。そこではさまざまな種類の文書の収集が、既に一つの図書館とも言うべきものを成立させていたのである。ものの本によれば、発掘された粘土板の中には、神話や讃歌など、シュメール語の文学作品のリストも含まれていて、書記たちは収集した文書に関して司書的な仕事も行っていたらしい。シリアの古代エブラ遺跡の例では、火災によって瓦状になった粘土板が床の上に山を成して発見されたそうであるが、木製の棚に文書を整理して保管した部屋が存在を示すものであろう。だが一枚の粘土板の文字スペースは表と裏を使っても限られているから、文書によっては数枚を要する場合が当然出て来る。しかしパピルス紙などと違って粘土板は綴じすることも巻物にすることも難しい。何枚にもわたる文書の場合には、整理されていた順序がやがて乱れたり、一部紛失したりする恐れが常にあった。ヒッタイト帝国の首都ハットゥシャの遺跡から出土した膨大な量の粘土板は、ちょうど頁付けをするように当の一枚が一連の文書の何枚目に当たるかを記すと共に、例えば文書の一行目をタイトル代わりに用いることによって、文書のまとまりを確保する工夫が施されているとのことである。司書という仕事は四千年にも及ぶ長い歴史を持つものだったのである。

（図書館長・文化学科教授）

「今、学生にすすめる本」特集（その14）

■グエン・ヴァン・チュエン（食物学科教授）

山田正二監修 『間違いだらけの健康常識』 PHP文庫 1998年

生活を営むうえで健康は重要である。新型肺炎（SARS）によって亡くなった人々は、医療関係者以外はほとんどが高齢者か罹患者である。近年、マスコミ（とりわけテレビ）により、健康や食生活などについての情報が氾濫している。その中には、正確な情報もあればそうでないものもある。我々はある程度の知識をもたなければ、それらが正確な情報であるかどうか判断できない。『間違いだらけの健康常識』は健康・食生活に関する常識的なことを分かりやすく紹介し、とても興味深い本である。例えば、「赤いトマトががんを予防する」「植物油は本当にヘルシーか？」「お茶はやはりウルTRASーパー栄養食品」「食べ過ぎが老化を早める」「野菜ジュースを飲めば野菜を食べなくていいのか？」といった話題があげられている。大変楽しく建設的な情報が得られる本であるので、時間があれば一読していただきたい。

■佐藤克志（住居学科助教授）

山之内俊夫著 『車いすでアジア』 小学館 2000年

車いす使用者である著者が介助者であるネパール人青年とアジアを回った旅行記である。車いす使用者が書いた単なる旅行記と言ってしまうとそれまでであるが、障害を持ったことに対する悲しみ、焦り、介助者であるネパール人青年との葛藤、国籍・障害による差別などが非常に素直な言葉で書かれており、そこから様々なメッセージを感じ取ることができる。スリランカで出会ったアメリカ人に「17歳の少年を奴隷のようにこき使って、おまえは王様気取りなのか」と言われたことで挫折しかかるが、それを機にお互いが尊重し合う関係が成立する。ネパール人青年の父親が言った「あなたが楽しければ、息子も楽しい」という言葉にも通じ、人間関係の本質を教えてくれる。

また、旅の途中で出会う困難は、障害者にとって物心ともバリアだけであることを物語っており、アジア各国の障害者がどのような生活を送っているのか、その状況をも考えさせられる。

■石井倫子（日本文学科助教授）

二宮正之著 『私の中のシャルトル』 ちくま学芸文庫 筑摩書房 2000年

タイトルと素晴らしいカバー写真の種明かしをしまおう。著者が「異邦人とか外国人とかい^{とつくにびと}うほどに気張った意識ではないにせよ、とにかくフランスに腰をすえていることを自分に納得させる必要があるとき」に「きまって念頭に浮かび上がってくる」のがシャルトルのノートル・ダム大寺院のイメージだというのである。

「母国語は宿命か」という問いと対峙しつつ「ことばを生きる」ことが本書のテーマ。三十有余年の長きにわたる滞仏経験の中で醸成された、フランスと日本の言語や文化への透徹した観照が、ここに結実している。その筆致はとても瑞々しく、時としてフランス映画のワンシーンを見ているようですらある。なにかずく印象に残るのは「詩人が言葉をうしなうとき」。生前親しく交流があった思想家森有正(1911-1976)との最後の日々を敬愛を込めて綴った文章は心に響く。

■新見肇子（英文学科教授）

マルティン・ヴァルンケ著 岡部由紀子訳 『クラーナハ<<ルター>>』 三元社 1993年

16世紀ドイツの画家クラーナハが描く女神や人間の女性たちは優美でありながら賢明な知恵者であることを窺わせるのびやかさと強靭さを兼ね備えている。悩みや悲哀とは無縁であるかのような彼女たちの軽やかさは魅力的である。このヴァルンケの本は、クラーナハの別の作品群、つまり彼の友人であったルターの肖像版画を扱っている。これらの版画が次々に姿と表情を変えることに注目し、それによってクラーナハがルターの宗教改革に寄与した政治的役割を解明している。豊富な図版を駆使した、肖像の変遷の分析は説得的である。また、クラーナハと一歳違いのデューラーとの比較も面白い。ルターの前に立ちはだかった、マインツ大司教で枢機卿アルブレヒトの両者による肖像画に関する考察は、版画の果たす社会的役割を鮮明に描き出して、スリリングでさえある。小冊ながら、芸術をそれが生まれた時代や社会というコンテキストの中で見事に論じている。

■近藤龍哉(史学科教授)

丸山昇著 『文化大革命に到る道：思想政策と知識人群像』 岩波書店 2001年

中国の作家巴金は、「文化大革命」を、ナチスのユダヤ人虐殺、広島・長崎の原爆と並べて、二十世紀の人類の三大悲劇と呼んだ。副題を「思想政策と知識人群像」とする本書は、中華人民共和国の成立以後文化大革命の直前まで、中国共産党の思想政策のもとで知識人を見舞った数々の批判運動を、当事者たちの証言や記録など豊富な史料を駆使して再現し検討する。中国現代史を考えるうえで必読の一冊である。

著者は、そこに文化大革命へと続く道筋を見定めているのだが、それらを歴史の回り道として否定し去り忘却のかなたに押しやる傾向には警鐘をならす。革命を目指しあるいは共感し参加した人々が、革命の名によって犠牲となり苦しんだという悲劇を可能な限り具体的に検証し、犠牲者の生と死の中から何かをつかみ取らねばならないとする姿勢を堅持する。中国で多くの知識人が革命を希求したのは事実であり、これらの辛い体験は受け継がれて、今日の路線を支える力とも、批判する力ともなっているのだからと。

■渡邊恵子(教育学科教授)

ハーブ・カチンス スチュワート・A・カーク著 高木俊介・塚本千秋監訳

『精神疾患はつくられる：DSM診断の罟』 日本評論社 2002年

最近のわが国のこころへの関心・注目はすさまじく、カウンセリング・ブームともいうべき現象がある。(スクール)カウンセラー志望の学生さんや身内に問題をかかえている方をもつ学生さんがいる一方、何か変だ・おかしいと指摘する学生さんもいる。こうした学生さんにすすめたい本書は、米国精神医学会による「精神疾患診断統計マニュアル(通称DSM)」が実質5回も改訂されてきた問題点を綿密なデータに基づき検討し、これを「診断」し、これに「警告」を発している。すなわち、改訂のたびに「科学を標榜した」診断名がいかに増えてきたか、DSMに診断名が認定されると保険がきくことにより、精神科医・臨床心理カウンセラーをはじめとして福祉関係部署・教育機関・矯正機関・関連研究機関などいかに連動しお金が動いているかなどを暴いている。今やDSMは国際的にも精神医学のバイブルになりつつあり、わが国も例外ではないのである。

■川原ゆり(心理学科教授)

安保徹著 『未来免疫学』 インターメディカル 2001年

免疫というと、日常的には病気や怪我の治りやすさや、予防注射などを思い浮かべてしまうが、心の働きや神経系との関連で免疫を考えることは少ない。しかし、昔から「病は気から」といわれるように、気持の持ちようによって、健康状態が変わってくることは、経験的に知られていた。

免疫学者の著者は、納得のいく最新の知見を盛り込んで、きわめて分かりやすくこのような「心と身体の働き合い」を説いており、興味深い著書である。さらに、免疫反応に新たな視点を加えて、免疫細胞の顆粒球とリンパ球の割合から、個人のパーソナリティや行動のパターンにまで言及し、日常のいろいろな場面を例にとり、健康状態との関連性を論じている。しかし、この免疫細胞の割合はたえず変化しリズムカルに揺れ動いているという。日々、自分の心身に生じている変化を、注意深く見つめることが、自分を知る手がかりとなるようだ。思いがけない視点である。

■宮本絢子(文化学科教授)

山田弘明訳 『デカルト＝エリザベト往復書簡』 講談社学術文庫 講談社 2001年

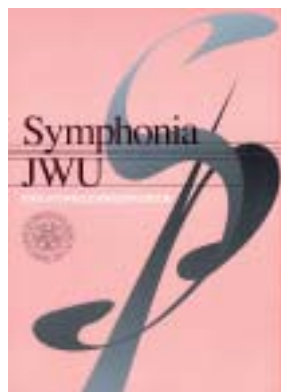
哲学者デカルトとボヘミア王女エリザベトとの間に交わされた60通の往復書簡。1643年(前者46歳、後者24歳)にはじまり、1650年初めのデカルトの死をもって終わる。

全ヨーロッパを巻き込んだプロテスタントとカトリックの戦い「30年戦争(1618-48)」において、王女の父はプロテスタント側の盟主ボヘミア王になった。そのため王女は両親とともに誕生地ハイデルベルクから栄光のプラハへ、その後追われ、ベルリンなどを経てハーグに亡命した。

当時の状況において、「私がこれまで世に出した論文のすべてを完全に理解した人は、殿下(王女)お一人」と大哲学者デカルトに賞賛された女性がいたことだけでも驚きである。書簡は難解な哲学問題だけでなく、お家再興を願う王女の努力や悩み、また叔父チャールズ1世の斬首に動揺する姿にも触れている。運命に翻弄される王女を慰め励まし、真摯に答えるデカルトの人間味溢れる一面も伝えているなど興味深い。

『Symphonia JWU — 日本女子大学創立百周年記念学生論文集』について

西山力也



本書は、副題が示すように、日本女子大学創立百周年記念として企画され、本年3月出版された学生論文集（A4版，344頁）である。「巻頭言」と「編集後記」には刊行までの経緯が述べられている。発端は、百周年記念事業がつつぎつつぎと実現していくなか、学園内に起こるべくして起こった「他ならぬ学生自身の肉声をいま、写し止めておきたいという切望」であり、この痛切な思いゆえに記念年の1年遅れながらも迅速に着手され、集中的な作業を経て刊行の運びとなったのである。

「募集要項」序文にはこう書かれている。「創立百周年に際して、わが国の女子高等教育において常に先駆的な役割を果たしてきた本学百年の伝統を見つめ直すとともに、新たな一世紀を切り拓くために本学が取り組むべき課題とは何か、女性が新たな時代の創造者になるためにはいかにすべきかについて意見を闘わせ、それによって日本女子大学の学生としてのアイデンティティの共有をめざす。」「アイデンティティの共有」とは、換言すれば、学生の帰属意識の確認でもある。大学がおかれている状況はまことに危うい。開かれた大学は時代の趨勢であるにしても、少子化に端を発する入試制度の多様化、5大学間単位互換制度などの導入によって、本学への帰属意識の希薄化がすでに始まっているのではないか、新たな一世紀の門出にあたって、実はこの点も「学生自身の肉声」で確かめてみたかったのである。

原稿募集は、記念年にちなみ採用論文数100編として昨年4月に開始されたのだが、最終的に集まったのは、101編（学部生47編，大学院生22編，通信生11編，留学生3編，卒業生9編，特別寄稿の附属高校生9編）であった。これが各論文のテーマに添って、「日本女子大学と私」「桜楓の人々との出会い」「二十一世紀の日本女子大学」「国際社会における日本女子大学」「男女共同参画社会の理想を求めて」「未来に向かって」の6章に編纂されたのである。編集委員会の事務局が学務部長室に置かれたので実務はここでなされたのだが、当時その任にあった筆者は、全論文を通読する羽目になった。辛くもあり、また楽しくもある作業であった。その時の印象を言えば、執筆した学生たちは附属校とか一般校とか出身の区別なく、ほとんどが一様に本学への熱い、純真な思いを語っており、「帰属意識の希薄化」は杞憂とわかって安堵したものである。このことは「日本女子大学と私」をテーマとする第1章が34編、全体の三割を占めたことから裏づけられよう。

紙幅の制限からここで各論文の内容を紹介することはできない。本書の大きな魅力を簡潔に言えば、公募と推薦を織り交ぜた募集の仕方とも密接に関係するのだが、何よりも学生の意欲・主体性が尊重されていること、つまり優等生ばかりの均質な論集にならなかったこと、執筆者も附属高校生、学部生、大学院生、留学生、通信生、卒業生というように幅広い年齢層にわたることからくる巧拙を抜きにした論文の多様性であろう。この点は本書の題名にも反映されている。「シンフォニア」（今日のシンフォニーの元になった語で、sym-「いっしょの」、-phonia「響き」が原義）には、玉石混交の101編が本論集の趣旨に賛同して集った若い思考・心情のまさに「いっしょの響き」であると同時に、21世紀のなかで大きく成長・発展する可能性を秘めた萌芽であるという意味が込められている。また、五線とト音記号の音楽的構図でまとめられた山影麻奈氏による表紙デザインは、配色はもとより図案化されたSPの文字の躍動感ゆえに、本学百年の歴史と新たな百年の可能性を象徴するかのようである。本学では創立以来、節目ごとに記念行事を行ってきたが、学生論文集の刊行は今回が初めて。その意味でも、後藤祥子学長が述べるように、「この冊子は本学の記念碑であると同時に、21世紀初頭を生きる若人の紛れもない縮図」「タイムカプセル」と言えるであろう。

* 目白・西生田所蔵 請求記号O.S.377.28-Nih

（史学科教授・前学務部長）

展示「^{あなた}貴女もなれるか『目白と雑司ヶ谷の達人』！」解説編

伊藤 寿和

2002年12月16日から2003年5月23日まで、本学目白図書館の玄関ホールにて、上記の小展示をおこなわせていただきました。展示に際しましては、前図書館長の出淵先生（英文科）と図書館の田口課長に展示のお誘いをいただき、司書の高野さんと橋本さんには展示のお手伝いをしていただきました。記して、厚く感謝申し上げます。

展示A. 「目白」の地名は女子大の少し東南にかつて所在した「目白不動堂」に由来します。

真言宗で新長谷寺と号していました。弘法大師の作と伝えられる8寸（約25cm）の「目の白い」不動明王を本尊としていました。ただし、「目白不動」を祀っていた新長谷寺が先の大戦で消失したため、「目白不動」は女子大と目白駅の間に位置する金乗院に移されています。なお、江戸時代の「目白不動」新長谷寺には「時の鐘」があり、周辺の人々に毎日の時を告げていました。

展示B. 雑司ヶ谷の鬼子母神を管理されている日蓮宗法明寺の方々は、「きしぼじん」ではなく、「きしもじん」と発音されています。表記も角がある夜叉の「鬼」ではなく、角の無い慈母の「鬼」の文字を使用しています。

展示C. 雑司ヶ谷の「鬼子母神」堂のシンボルはザクロ（石榴）です。これを食べると人間の味がするとの俗説もあります。絵馬や釘隠しなど、鬼子母神堂の至る所でザクロの意匠が見受けられます。ザクロの中には、赤い小さな実がぎっしり詰まっていますので、その赤い色が人間の血をイメージさせたのかも知れません。その実の多さから子たくさんも意味しており、ザクロには両義的なイメージが付されています。鬼子母神は母子の守り本尊とされ、現在も多くの人がお参りに訪れています。



展示D. 雑司ヶ谷霊園にある著名人の墓所に関しては、前号をご参照ください。

展示E. 女子大の寮の前の緩やかなカーブに関しても、前号をご参照ください。

展示F. 肥後国を支配していた旧細川家の下屋敷であった「新江戸川公園」の冬の風物詩は、北国から飛来した「鴨」と、松の「雪釣り」です。年末・年始には、この両者を一度に眺めることが可能です。ぜひ、お出かけください。また、初夏には千葉市内で発掘され二千年の眠りから目を覚ました弥生時代の「大賀ハス」も咲いています。伝承では、早朝にハスの花が咲くときに、「ポン」と言う小さな妙なる音が聞こえるとも言います。ぜひ一度聞いてみたいものです。しかし、熱心な仏教徒でない私は、未だ、ハスの咲く音を聞いたことがありません・・・無念。無念。

展示G. 関口芭蕉庵の周辺で働いていた芭蕉の仕事に関しては、前号をご参照下さい。

展示H. 護国寺を建立したのは、犬公坊と生類憐みの令で名高い五代将軍の徳川綱吉です。

展示I. 護国寺境内で登れる日本の名山に関しては、前号をご参照ください。

展示J. 音羽通りの高台に所在する「鳩山会館」の屋根の南正面には、知恵の象徴である4羽の白い「ミミズク」が取り付けられています。また、同じく屋根には、鳩山家のシンボルである白い「ハト」も取り付けられています。

展示K. 女子大キャンパス内の樹木に関しては、前号をご参照ください。

前号に引き続いてお読みくださり、ありがとうございました。

(史学科教授)

日本女子大学図書館友の会第38回（平成15年度）総会開催される

図書館5階の西南角に、日本女子大学図書館友の会の事務室がある。図書館友の会は、日本女子大学図書館及び成瀬記念館の充実発展に寄与することを目的としている。目白の現図書館開館1年後の1965（昭和40）年6月23日（本学創立者成瀬仁蔵先生の生誕記念日）に、第6代学長上代タノ先生の提唱により創設された。会員は本学教職員、卒業生、在学生やその父母その他（一般）で組織され、会員数は現在459名。今年6月で38周年を迎える。



挨拶をされる新海邦治館長

去る5月31日（土）午後1時に百年館4階マルチメディア室Iにおいて、図書館友の会第38回総会が開催された。友の会役員でもある石山常子氏の司会により午後1時に開会し、会員約45名が出席して進められた。最初に友の会会長・学長後藤祥子先生が挨拶された。図書館友の会の日頃の活動についての謝辞や、上代タノ先生がこの会を立ち上げられたその初心に戻って努力したいものと述べられた。続いてこの4月より就任された新図書館長新海邦治先生の挨拶に移り、新任の抱負、目白の図書館は上階へスペースが広がったこと、図書館の今後のあり方については、さらに検討していかなければならないのでよろしくお願ひしたい、と述べられた。

総会の議長に齊藤令子氏が選出され、議事に入った。平成14年度事業報告で、事業一般報告は阪田香公子氏、上代タノ平和文庫報告は松本晴子氏、卒業生著作調査報告は、藤岡恵実子氏が報告された。事業一般報告としては、「近代女性文学を読む」（日本文学科倉田宏子教授）他5コースの講座・読書会を開催、文学散歩「林芙美子記念館ほか」などの研修会・見学会を年4回実施、友の会会報を年3回発行などの報告がなされた。上代タノ平和文庫報告の中では、平和文庫の選書を担当されている平和文庫運営委員の紹介もあり、平成14年度は24万円・122冊の図書が選書・購入されている。「上代タノ平和文庫」は、図書館5階に配置されていて図書の貸出もできる。友の会作成の『日本女子大学卒業生著作目録』は、1997（平成9）年に改訂増補版が発行され、今回は追補Ⅶ



決算報告をされる玉木照子氏

となっている。会計の玉木照子氏による平成14年度決算報告の後、監事石山常子氏の監査報告があり、決算は拍手で承認された。続いて平成15年度事業計画案および予算案説明が常任理事飯塚美子氏によってなされた。平成14年度より継続的に立てられた事業計画案に沿って、予算案はきりつめられている。事業計画案および予算案は拍手により承認された。議事の後に、上村美紗子図書館事務部長により、詳細な平成14年度図書館報告があった。友の会副会長徳末愛子先生の閉会の辞があり、総会は終了となる。

休憩・歓談の後、翻訳家白須英子氏（新制8回英文学科卒）の講演会「イスラム世界の女性たち」が、開催された。講演に先立ち竹澤恭子氏により、白須氏の紹介がなされた。これから9月に出版される『イスラム世界の女性たち』は、初めての著書（エッセイ）であると話された。（総会の会場には、白須氏の訳本など十数冊が展示されていた。）講演は、マルチメディア室ならではの大きなスクリーンに、白須氏自ら機器を操作して、映像を提示しながら進められた。講演の最後に参加者から、感想やイスラムの女性たちについての質問が多く寄せられ、白須氏は丁寧に質問に答えられた。午後4時15分会は終了した。（田口記）

Technical Processing & Documentation Forum T P & D フォーラム：整理技術・情報管理等研究集会

鈴木 学

このフォーラムは、図書館で伝統的に行われてきた整理技術と情報管理とを統一のとらえようとする、研究指向の強い全国規模の研究集会である。第一線の研究者を始め、図書館員やシステム開発者など研究者と実務者と同じ場所に集い、分類理論や目録論といった整理技術論、ドキュメンテーション理論、用語管理や Knowledge Organization といった情報組織化理論、情報検索論などの研究成果の発表の場としてだけでなく、発表後には十分な討議の時間をとり、発表者と参加者との質疑や意見・反論、更には参加者同士の議論も行われている。その一方、一泊二日での開催スケジュールで行われるため、発表・討議後にも議論を続けることができることに加え白熱した論争のアフターケアも行え、参加者同士の交流ももてるようにしっかりと配慮されている。名前も知らなかった参加者同士から一步踏み込んだ関係を作り上げることができるといえよう。もちろん様々な情報交換もなされていることは言うまでもあるまい。このフォーラムにより発表内容に対する理解が更に深まると共に関連分野への知識や関心、そして新たな分野への興味も生まれることが期待できる。

近年の図書館では、業務の簡素化に端を発した図書館業務のシステム化の進行にともない、整理技術の理論的側面は影を潜め、実務者である図書館員でさえ、自らその理論を支えていこうという意識は次第に薄れつつあるようだ。いつしかそれは整理業務自動化への幻想につながり、整理技術不要論へと向かっている。つまり、何でもシステム化できる、という考え方である。

その一方、資料・情報と利用者とをつなぐ、それも効率よく探しだし、的確にアクセスでき、迅速に手に取れる、という図書館の役割は永遠に変わらないまま、インターネットという巨大な情報資源提供の可能性を持つ現象に対峙するという新たな課題もかかえた。

そのような課題に対して、図書館は以前から資料・情報を分類や目録などの整理技術を駆使した組織化により、あるいはOPACや外部データベースといったオンラインアクセスの環境を開発し整えていくことにより取り組んできた。その際システム化は課題の解決に向けてはある程度の力となっているものの、システム化そのものは理論的な背景を具現化しただけのものである。根底に流れる理論はシステム化とは全く別の次元で語られなければならない、理論的に貧弱なシステムは図書館の活動とは無関係な場面で、様々な問題を引き起こすこともある。そしてインターネットに対しては、その適用が問われているのである。

インターネットを含め情報環境の進化により図書館の業務は質・量ともに展開しつつある。このフォーラムは図書館で取り組んできたこれらの課題を理論的に、全国的に、研究者だけではなく実務者も共に、支持・発展させていこうという取り組みの具体的な一つの動きである。WWWページも用意されているので機会があればご覧いただきたい。開催を遡ってたどることができる。また各回の研究発表は、討議の内容等を踏まえ、開催後「整理技術・情報管理等研究論集」としてシリーズで刊行され、かなり読み応えのある内容に仕上がっている。本学の図書館でも所蔵しているのでこちらも手にとっていただければ幸いである。

URL：<http://www.logob.com/users/tpd/>

※筆者はこのフォーラムでは第4回以降実行委員を、第9回・10回の開催では実行委員長を務める。
(館員・閲覧係)

図書館（目白）からのお知らせ

☆新しく5階のフロアがオープンしました。

- ・5階フロアは、改修工事と資料の移動を終えて、平成15年4月より利用が開始されました。洋雑誌を1階から、上代タノ平和文庫を4階から5階に移動し、配置されています。百年館側には多目的室ができ、参考係が行うガイダンスなどに使用されています。
- ・5階（洋雑誌ほか）の開室時間は、1階（和雑誌ほか）の開室時間と同様です。学部授業がある日の月～金曜日は午後6時50分まで、土曜日は午後4時50分までです。

☆カラーコピー機を設置しました。

- ・2階の複写機3台のうち1台は、カラーコピー機に変更になりました。
- ・カラーの複写料金は、1枚50円です。
- ・1階および5階にある資料のカラーコピーをする場合は、1階カウンターおよび5階カウンターで2階へ持ち出しの手続きをしてください。

☆玄関ホールにおいて、アフガニスタン関係資料の展示を、9月30日まで行っています。

図書館（西生田）からのお知らせ

☆カラーコピー機を設置しました。

- ・2階ブランジングコーナーに、カラーコピー機を設置しました。
- ・カラーの複写料金は、1枚50円です。

☆アフガニスタン関係資料を、2階ブラウジングコーナーの新刊展示棚に展示しています。

図書館事務室より 図書館の前年度は、目白図書館棟については、百年館への文学部移転に伴う改修工事と、全館の再利用計画に基づく具体的な整備で終始した。年間を通しての様々な関連作業では、利用者の皆様に相当のご不便とご迷惑をおかけしており、このことをまずお詫び申し上げる。書架増設および閲覧室の変更をはじめとする利用者向け施設、設備では、1階～3階、5階は、平成15年4月、新たな運用による利用サービスを開始し、春から初夏へと経過した。それまでの1階の洋雑誌は、5階配架となりそこで利用していただくことが大きな変更になる。4階は、今夏、百年館低層棟完成後、授業用演習室部分が図書館から移転されると、壁撤去の工事が始まり、フロアの機能整備に着手する。ここに至る検討経緯では館員相互の議論を背景に、事務室は繁忙を窮めつつも、建物の老朽化はなんとか凌ぎ、スペース面の窮状は、ほっと一息、一瞬の光芒を見ているところである。◆平成14年度、図書館、学部、大学院、通信、研究所、センター等全学で購入した図書資料費は、約2億8千2百万円であり、この金額に相当する年間増加冊数は、約22,000冊。全蔵書冊数は、692,443冊（目白：543,729冊、西生田：148,714冊）、雑誌は、14,585種類となった。一方、入館者は、年間延べ約21万人（目白：141,166人、西生田：71,697人）で、1日平均目白600人、西生田300人、試験期は、各750人、400人の利用がみられた。◆平成15年度は、新図書館長に、新海邦治先生が就任され、すでに第1回の図書館運営委員会を招集して、新年度における予算ほか運営の方針についての審議がなされた。構成員のうち、図書委員会委員は、岡本吉生（児童）秋元健治（家政経済）鈴木健一（日本文）マイケル・ガーデナ（英文、8月まで）河口道朗（教育）平木典子（心理）濱部勝（数物科）永田三郎（物質生物科）の諸先生方である。（上村）

編集後記 6月23日で現目白図書館は、開館39周年を迎えました。『Symphonia JWU — 日本女子大学創立百周年記念学生論文集』は、和書大型本（O.S.）なので、目白の図書館では4階、西生田では3階に配架されています。どうぞ一読ください。巻頭のカットは、山村いづみ館員による。図書館ホームページのOnline Journal → 学内刊行物 1. 図書館だより → No.117を見ると、実はカラーのカットなのです。（田口）